

## 「弱さ」を受容するということ —本居宣長「物のあはれ論」に即して

田 畑 真 美

本居宣長の「物のあはれ」論は、単なる歌論や文学論の域に留まらず、倫理学の問題、すなわち人間と人間との間柄の諸問題、とりわけ他者理解に関する重要な問題をも提示していると言える。歌や物語作品を通じて、人はいわば人間の物の感じ方や感情の手触りの「型」をなぞり、自分の感情の有り様を確認しながら他者の感情を理解する。宣長は、この「型」を源氏物語をはじめとした古典の世界を元に構築している。

宣長の論において他者理解の問題を論じるという場合、他者はどのような存在なのか、その他者間に成立する関係とはどういったものなのか、さらにその理解の中身や水準等が問題となりえよう。これらは一つ一つ検討すべき問題であるが、今回は他者の何を理解するのかということに焦点をおき、特に人間存在が共有する「弱さ」を理解するという点について考えてみたい。素材としては、『紫文要領』『石上私淑言』を中心に扱うこととする。

### 一、「弱さ」とは何か（1）情の本質

#### （1）人間の实情

まずはじめに基本的なところ、すなわち宣長における人情の根本的な位置づけを確認しておく。宣長によれば、人間の情（こころ）、人情というものは本来、弱く頼りないものである。

すべて人の心といふものは、实情は、いかなる人にも愚かに未練なるものなり。それを隠せばこそ賢こげには見ゆれ、真の心の内をさぐり見れば、誰も誰も児女子のごとくはかなきものなり。（『紫文要領』巻上p.67<sup>1)</sup>）

大方人は、いかに賢しきも、心の奥を尋ねれば、女童べなどにもことに異ならず、すべて物はかなく女々しきところ多きものにて（中略）みな心のおくは同じはかなさにて、まぬかれがたき人情なれば、常にこそ賢しげに物をいひ、賢こくうちふるまふめれど、深く哀しき事にあたりては、かならずめめしく人わろき情の出で来て、えおもひしづめず、心まどひもしつべきをりもおほかる物なり。（『石上私淑言』巻二p.408-p.410<sup>2)</sup>）

とあるように、「はかなく」「めめしく」あること、すなわち弱くあることは人間の情の普遍的なありようである。しかしその普遍的なありようは、世間では積極的に評価されていない。たとえば「賢げに」振る舞うことに重きを置き、「むべむべしうるはしき」（同p.410）さまに取り繕おうとする人はそれを否定的に位置づけ、隠そうとする。包み隠さずそれを表出すれ

ば、「人わろき」すなわち人目の悪い、愚かな振る舞いとなるからである。真実のありようを隠す、それを宣長は「偽れるうはべ」（同）と言う。つまり宣長は、言語的には女の子のようであり、「はかなく」「めめしき」ものとして否定的に表現されている情を、自身では決して否定的に見ていない。人間の情はそもそもこういうものなのだ、という事実認識がまずある。そのうえで、うわべは取り繕っているにせよ、確実にどの人間存在の奥底にもあるほんとうのありようとして位置づけるのである。

さらに注意したいことは、それが人間にとって真実である故とも言えるのだが、「こころの奥のはかなさ」の存在そのものを誰も否定しきれず、またその動きから完全に解放されえないということである。表面はきれいに整えていても動くべき真実の情は奥底にあり、動く可能性を内在している。「深く哀しき」こと等然るべき事象に触れたとき、人はその情を鎮め得ず、コントロールしがたくなる。まさに「まぬかれがたき」状況であるが、宣長はこの「まぬかれがたさ」を重視していると言える。人間存在全てが女の子のような弱々しい実情につながり止められているという、どうしようもなさ。否定しようとしても否定し得ない、どうあろうと人間が負わざるを得ない共通の負荷のようなものとして、それはある。とすればその「まぬかれがたさ」は、人間であるならばどの存在もが例外なく正面から引き受けなければならないものとなる。それを引き受けることはある種の人間が求める整然とした端正さからはかけ離れているであろうが、世間の目や儒仏の道徳規範という外部の制約に拘泥するのではなく、自分自身の内部の実の有りようを直視し、それに沿うことは、人間のあるべきありようである。ありのままの情が持つ「まぬかれがたさ」は、人間にとって積極的な拘束力として存するのではないか。人間とはまず、自らを取り巻く様々なものごとに対して反応せざるを得ない存在なのである。

もちろん、上に引用した箇所のみからそこまで読み込むのは行きすぎであるし、それとは別にまた、情の表現の仕方の問題も出てくるが、ここでは「まぬかれがたさ」という語に象徴される人間の情の普遍性を指摘するにとどめておく。

## （２）「物のあはれを知ること」

さて、もう一つ確認すべきことがある。さきに「深く哀しき」というような事象があれば人間は必ず、弱々しい真の情が表出することを述べたが、これは、しかるべきものを対象にしたときの然るべき反応をする、もしくはせざるを得ないということでもある。

「悲しきことも悲しからず、憂きわざも憂からぬは、岩木のたぐひにて、はかなき鳥虫にも劣れるわざ」（同）であるというように、この反応をせざるを得ない状況で反応しないことは、人間を人間たらしめる部分が欠けている、もしくは人間としては相応しくない態度であるということになる。そしてこの、情が応えるべき状況があり、それにしかるべく情が反応するということは、まさしく物のあはれを知ることにはほかならない。

物のあはれを知るとは、宣長によれば「すべて世の中にありとある事にふれて、その趣き・

心ばへをわきまへ知りて、うれしかるべきことはうれしく、をかしかるべきことはをかしく、悲しかるべきことは悲しく、恋しかるべきことは恋しく、それぞれに情の感くが、物のあはれを知るなり。」(『石上』巻一p.299) というように、世の中のあらゆる事象の本質<sup>3)</sup>に触れて情が動くことによる。そもそも生きとし生けるものはみな情を持ち、その情はありとあらゆる事象に反応し、動く本質を持つ。殊に人間は体験する事が多く、情が動くことも多くなる<sup>4)</sup>。

そして情が動くのは、その事象の本質を分別し、理解しているからである。

知るゆゑに動くとは、たとへば、うれしかるべき事にあひてうれしく思ふは、そのうれしかるべき事の心をわきまへ知るゆゑにうれしきなり。また悲しかるべき事にあひて悲しく思ふは、その悲しかるべき事の心をわきまへ知るゆゑに悲しきなり。(『石上』巻一p.282)

「べき」という助動詞に表されているようにそれは、対象に沿う適切な反応である。「世の中にありとしある事のさまざま」の「事の心」すなわち本質を「わきまへ知りて、その品にしたがひて感ずる」(『紫文』巻上p.125) ともあるように、それは単なる感じやすさではなく、対象の本質を知り、それに従って一つの型を志向する反応である<sup>5)</sup>。つまり、人間の情の持つ女子供のような弱々しさという性質は、事象の本質への感度の鋭さのみならず、反応の適切さという点で、「物のあはれを知る」ということの本質と直結しているのである。

具体的な例でもう少し考察する。例えば宣長は、愛しい子供に先立たれた時の母親の「ひたぶるにふししづみて涙にくれ感ひ、かたくなしきことどもをいひ続けて泣きさまよふ」(『石上』巻二p.412) 様を「飾らぬ真の情」(同) とする。その様子は確かに「女童へのしわざ」(同) であるが、宣長は子供との死別という悲しむべき事象に対して同じく悲しい感情を抱いているはずの父親が表面を取り繕わざるを得ないのに対して、真の反応として位置づける。子供との死別で感じた深い悲しみはさらに、歌などのかたちに表出されることで晴らされねばならない。

情を抱える本人がその思いを晴らすということはまた別の問題<sup>6)</sup>にも通じるので、ここでは述べない。重要なのは、人が悲しいと感じるべきことにしかるべく反応し、その情の動きをありのままのありようであると受け止め、自分の思いの在処をごまかさないことである。人目など体裁のフィルターに左右されず、自身の情の本質と素直に向かい合う。そしてそれを恥ずべきこととせず、そういうものだと受け止める。それが人間のあるべきありかたであり、もののあはれを知っているということにもつながっていくのではないか。もとより、感ずる心は「わが心ながらわが心にもまかせぬもの」(『紫文』巻上p.126-127) なのである。自分のものだが制御しがたいといういたしかたなさが、その根底にはある。

さらに言えば、自分自身の真の情の動きとの対峙は、物のあはれを知るとされる人が、他者がとある経験をしたときにどのような感情を抱いているのかについて非常に深く知っているということとも繋がる。先取りして言えば、自分が人間としてそうであるからこそ、同じ人間である他者もそうである、ということを理解する。この理解の水準が、「物のあはれを知る」と

いう営為に、その場その場での物事への反応という意味だけでなく、人間の理解という一層深い意味を与えているのではないか。自身の情に向き合うだけでなく、他者の情のありように向き合う、他者の情をその背景を含めて理解するという場面において、より一層「物のあはれを知る」の本質がみえてくるのである。この意味でも、情の「弱さ」とは否定的なものでありえない。自己を通して他者を、もしくは他者を通して自己を理解する共通基盤にもなりうるのではなからうか。

ところで、他者の情とも向き合うという意味での「物のあはれを知ること」が明確に見えるのは、歌や物語でも多く取り上げられる恋の場面であった。そこで次節では、恋の場面をめぐって人間の情の本質をさらに切り込んでいくこととする。

## 二 「弱さ」とは何か(2) 色恋を巡って

### (1) 色恋の制御しがたさ

先に見たように、物のあはれを知るとは対象ごとに然るべき反応をすることであった。したがって、物のあはれを知ることには対象如何によって当然様々な位相、換言すれば情の動きの深淺が生じうる<sup>7)</sup>。そして、物のあはれを知ることが深ければ深いほど、その情の動きは人間にとって一層制御し難きものとなる。その代表的な場面が、色恋である。

宣長は情の深さが色恋において甚だしく、そのために物語や歌で扱われることが多いと考える。「人の情の深くかかること、恋にまさることなき」(『紫文』巻上p.41) 恋は他の事象と比べてひととき人情と関わりの深いものであり、「恋は万のあはれにすぐれて深く人の心にしみて、いみじく堪へがたきわざ」(『石上』巻二p.420) というように、あはれの深さも群を抜く。

宣長は、色恋に染まる情について次のように述べる。

色に染む心は人ごとにまぬかれがたきものにて、この筋に乱れ乱れそめては、賢きも愚かなるもおのづから道理に背けることも多くまじりてつひには国を失ひ身をいたづらになしなどして、後の名をさへ朽しはつるためし、昔も今も数知らず。さるは誰も誰も悪しきこととはいとよくわきまへ知ることなれば、道ならぬ懸想などは、ことに心から深く戒めつつしむべきことなれども、人みな聖人ならねば、この思ひのみにもあらず、すべて常になすわざも思ふ心も、よきことばかりはありがたきものにて、とにかくに悪しきことのみ多かる中にも、恋といふものは、あながちに深く思ひかへしてもなほしづめがたく、みづからの心にもしたがはぬわざにしあれば、よからぬこととは知りながらも、なほ忍びあへぬたぐひ世に多し。(中略)たとひうはべは賢しらがりて人をさへいみじく禁むるともがらも、心の底をさぐりてみれば、この思ひはなきことかなはず。(『石上』巻二p.424-425)

簡潔に整理するとまず、色恋の情はどんな人間でも抱く共通の情である。しかし色恋は人間に道を踏み外させ、ともすれば国をも滅ぼすことにもつながりうるものである。色恋により道

を踏み外すことを人は罪悪と弁えるが、問題は人がそれを制御できないことにある。無理に鎮めようとしても制御しがたい、ともすれば道を踏み外す方向へ自らを導くもの、それが色恋である。色恋の情のすさまじさは、自分の情であるにも拘わらず、従わせることができないことにある。ここで宣長が、人間は聖人ではないし、基本的に色恋に限らずよくない思いを抱くことが多いという消極的な人間観を示していることも興味深いが、ここで明らかにされているのは、人間の持つ限界-自分で、自分自身の感情をどうしようもできないことである。道徳的判断や規範ですら、それをどうすることもできない。これはまさしく人間共有の弱さに他ならない。

では、この弱さに対して宣長はどう評価するのか。順を追って考えていく。恋をする人としていない人では、前者の方を宣長は評価する。厳密に言えば恋は、こうありたいという何かを求める欲望から生じる。欲も情の一種ではあるが、欲に留まれば、あはれの深さとは程遠くなる。色恋は欲から生じたとしても、こまやかで深い情の方に深く関わる思いである<sup>8)</sup>。したがって色恋において他者を求める思いは金銭や宝をほしいと思う欲望とは区別され、より高次の深いものとされる。色恋の情を抱く人は深い情を抱ける人であり、「物のあはれを知る」人なのである。

一方宣長は、色恋において、「あだなる」と「物のあはれを知る」ことの区別を厳密にする。色恋の対象が単数か複数かは問題ではない。「あだなる」ことすなわち浮気なさまは、結局は物のあはれを知らないありようであると宣長は考える。「あだなる」人の思いは深いどころか、「こもかしこもなほざりに思ふがゆゑに、いづ方へもなびく」（『紫文』巻下p.161）浅いい加減なものである。一方、「物のあはれを知る」人の思いは「忍びがたき哀れ」（同p.162）があり、どの人にも忍びがたい深い思いを向ける。両者の違いは、思いの深さ、真摯さにある。耐え難きほどの深く、真実なる思いを他者に抱ける、それが「物のあはれを知る」人のありようであり、宣長はその思いの持ち方-忍びがたき深さを評価するのである。

以上からすると、色恋における弱さは、宣長においては必ずしも否定的に評価されてはいない。むしろ逆に、積極的に評価されている。このことは、宣長が具体的にどのような人物を理想的な存在として評価しているかをみれば明白である。「物のあはれを知る」人物として宣長が「よきひと」と高く評価するのは、たとえば『源氏物語』の源氏や藤壺等である。いずれも不義の恋の当事者であるが、情の深さは、特にこの不義の恋の場合にあらわれる。道徳的規範と相容れない不義の恋であるというシチュエーションであるときに、思いは一層深くなるのである。換言すれば、ことさら言動をおさえなくてはいけないときにかえって、物のあはれは深くなり、抑えがたくなるのである。そしてそれを他者の状況として理解する際、道義的に裁断するか、もしくは理解し受容するかは、その状況を間接的にも直接的にも見聞きして触れる人自体の評価にも繋がる。すなわち、その人が「物のあはれを知っているか」「知らないか」である。

抑え難きほどの深き情を知る人、その抑えがたさを知り経験する人は、いわば弱さと向き合い、知り、経験している人である。それらの代表が、源氏や藤壺、さらに柏木など<sup>9)</sup>なのである。これらの人々を宣長は、深い情を持ち、また理解する「物のあはれを知る」よき人として高く評価するのである。

この中で特に源氏に即して、もう少し考えみる。源氏は二つの点で理想だと言われる。まず第一に、源氏自身の恋のありようの点においてである。先に述べたように、複数の人にしかもそれぞれに中途半端に寄せる浮ついた思いは、理想的な恋ではなかった。源氏も複数の人に同時に恋をし、また不義の恋も中にあるのだが、源氏の恋は「物のあはれを知る」ことに徹している。たとえば、「源氏の君は思ひ人たち多くしてこれかれに心を分け給へば、ものの哀れ知らぬともいふべきやうなれども、これも、いづこもいづこも哀れの忍びがたきところあるゆゑにかくのごとくなれば、あだなる人とはせず。」(『紫文』巻下p.162) というように源氏の人の愛しかたは、多方面に向かうにしても「哀れに忍びがたき」というたえがたき深さ、愛さざるを得ない深さが存する。このことは、「末摘花はかたちもわろく御心も万後れて、取りどころなきやう人なれども、身の御ほどを思し召し、心細き有様を思し召すゆゑに棄て給はず。花散里はかたち悪しけれど、心ざまのよきゆゑに棄て給はず。」(同) と他の人ならば見向きもしないであろう末摘花や花散里を、各々その惨めな境遇に感じ入って、もしくはその心のよさを見いだして、というように棄てずに大切に思ったという例で、説明されている。宣長はここで、源氏が人をひとりひとりなおざりにせず大事に思う、思わざるを得ないように動く情のありようを評価している。「忍びがたき」=たえがたさという語が、ここでもポイントである。そして、その忍びがたさは相手のありようと真摯に対峙し、決して相手の存在をないがしろにしないという誠実さをも持つものである。むしろ相手を真剣に見るからこそ、忍びがたくなるのであろう。

いうまでもなく、源氏と薄雲の女院(藤壺)をはじめとする不義の恋も、この忍びがたさによるものである。相手の持つ魅力に対する感受性の鋭さを忍べないゆゑに、源氏は不義の恋を繰り返す。後に源氏は、薄雲の女院との密通を罪深く思い、秋好む中宮への思いを「似げなき事」としてはいるが、恋を忍ぶことはそう簡単ではなかった。朧月夜との密通を絶やすことはなかったのである<sup>10)</sup>。

ところで、こうした恋における忍びがたさには、源氏のみならず相手も向き合っている。たとえば薄雲の女院(藤壺)自身も源氏のすばらしさに情を動かさざるを得ず、源氏を愛したのである。宣長は、「源氏の君に逢ひ給へることも、物の哀れにしるびぬ御心のありしゆゑ」(『紫文』巻上 p.94) であるとし、宣長は、薄雲の女院のすばらしいものに情を動かさざるを得ない感度の鋭さを評価する。不義であると一方で分かっている、源氏のすばらしさに応答せざるをえない。2人の恋は、ともに物のあはれを深く知り、情の「忍びぬ」ありようと向き合った者同士の恋であったと言える。

ともあれ、重要なことは「いとあるまじきことといみじく思し返すにも、かなはざりけり」（『紫文』下p.153 『源氏物語』若菜の上）という源氏の心境である。あつてはならない、我慢しなければならぬが、それが叶わぬ恋の情の途方もない力と、それへの抗い難さ。それを自分の身を持って知っているということが、物の哀れを知ることなのである。

ここで、問題は次の問題に繋がっていく。そうした自分自身の恋の情へのどうしようもなさ、耐え難さの経験は、同じ状況にある人に対しての理解を可能にする。すなわち、道義的観点で相手を裁かず、深く咎めないのである。そこで次に、源氏本人がどのように恋をするかという点のみならず、恋をしている他者をどう評価するかにおいて、その理想的有り様を見てみる。

宣長は、「よき人は物の哀れを知るゆゑに、好色の忍びがたき情を推量りて、人をも深くとがめず。ことに朱雀院の源氏をとがめ給はぬと、源氏の君の柏木を哀れに思し召すとは、いたりて物の哀れを深く知る人にあらずはかくはえあるまじきことなり。」（『紫文』巻下p.158）として、朱雀院と源氏を挙げて評価する。彼らが評価されるのは、人間にとって色恋の情が耐え難いものであることを知った上で、道を踏み外して彼らに不利益を与えた人を咎めないという点である。ポイントは、「好色の忍びがたき情を推量りて」という箇所である。朱雀院と源氏は、「好色は人ごとにまぬかれがたく、忍びがたき情のあるものといふことを知り給ふゆゑ」（同p.158-p.159）咎めたりせず、また「哀れに」お思いになるのである。

源氏について言えば、柏木と女三の宮の件は世間の常識、道義的規範いずれから見ても源氏は柏木を憎みこそすれ、理解したりするべきではない事件であった。しかし源氏は、柏木を断罪する前に理解し、その死を後々までも思い出して忍んでさえいる<sup>11)</sup>。たとえば宣長は、『源氏物語』柏木の巻の、柏木と女三の宮の間に生まれた薫を見て深い思いを抱く場面について、「源氏の君の薫を見て、過ぎにし衛門の督のことを思し召す心なり。「心もて身を失ふ」をば、物の哀れ知らぬ人はかへりて憎むことなるを、かへりていよいよ哀れに思し召す御心、物の哀れを知るゆゑなり。」（同p.155-p.156）と、憎悪の心でなく、かえって一層の感慨を抱く姿勢を物のあはれを知る態度として、評価している。

一方、柏木自身も物のあはれを深く知り、その点でよき人に数えられていた。柏木は、死ぬほどの思いの深さにおいて評価されている<sup>12)</sup>。「柏木の衛門の督の好色によりて空しくなるも、そのしわざを賞するにはあらず。身をいたづらになすほどの物思ひの深き心のほどをあはれぶなり。」（『紫文』巻下p.160-p.161）「かの女三の宮のことによりて病つきてはかなくなりぬる衛門の督のことよ、あるが中にも哀れなるものなり。」（同上p.92）というように、注目される場所は不義の行為そのものではなく、それに至った深い思いの方である。死ぬほどの思いを抱ける柏木は、「物のあはれを知る」理想の人であると言える。物のあはれを知る-自分でも恋の堪えがたさを知っている-源氏が、柏木の抱く恋の耐え難さを知り、その情を推し量って理解する。これは、物のあはれを知る人こそが、物のあはれを知る人を真に知るということである。

もあるのであろうか。片岡山説話の聖人こそが聖人を知る、ではないがそうした含みもあるのかもしれない。ともあれ、その身において切実に色恋の情の抑えがたさを体験し、自らもそれをまず自分のこととして、そして人間一般の免れぬ事としてよく知るからこそ、恋に身を焦がす相手の情を知り、受け止めるのである。

むろん、色恋の情を抑えられないことと、道徳的判断が不可能であることとは同じではないし、野放図に奔放に振る舞えばよいというのでもない。当人はその行為が悪という判断はできるし罪と考えることもできるのだが、どうしようもないのである。もとより抑えがたい色恋の情は、普段そんなことは感じないと取り繕っている人にも存し、誰1人としてそこから逃れられないものであった。このことは当人が特別恋の情を抑制できない弱さを持つからそれを制御すべきだ、ということとは問題の質が異なるし、宣長もその点を慎重に区別する。ともあれ、深い情は抑えがたいものであり、聖人ではあり得ない人間は、人間一般が一樣に背負う自分の内部にあるその存在とつきあうほかはない。この人間の真実が、ここでは問題なのである。

ところでこうした源氏の姿勢は、読み手に戒めではなく「物のあはれを知る」とはどのようなことかをも知らしめるものである。もとより『源氏物語』は、「物の哀れを深く書いて、読む人に物の哀れを知らする」（同p.200）目的で書かれ、読み手の心を動かすことを狙いとしていた。読み手もまた、柏木を受容し理解する源氏の態度を通して、物のあはれを知るとはどのようなことか一人の恋情の抑えがたさとその深さを知り、受容することを知るのである。

そしてさらに読み手は、「恋するとて思ひ入るるを、人の上に見たり聞きたりする時は、うつし心とも思はず、もどかしう思ひしが、今わが身の上に恋してみれば、げにいかにも堪へがたかるべき事なりと、わが身に思い当たるなり」（同p.146）というように、ただ読んだだけではピンと来なかった恋情を実際の自身の体験に基づいて「ほんとうに堪えがたいことなのだ」と実感することもあるのである。

以上まとめると、宣長において、人間が持つ色恋における「情の深さ」が尊ばれていることがまず言える。そして、その情の「まぬかれがたさ」を知ることの重要性をも宣長は指摘する。つまり、恋の場面で言う弱さとは、まずは人間の持つ情の深さである。そしてその、深さを自分でもどうすることもできないということである。宣長は、『源氏物語』の各所から「あやしの心とやわれながら思ざる」「思ひ返し給へど、えしもかなはず」「みづからの心にもしたかはぬ」等（『紫文』下p.147）の詞を挙げ、自分で制御しがたさを強調する。しかもこれらの状況は「人ごとに離れがたき」（同）のものであり、誰でも人として免れ得ない状況である。すばらしい異性に対して色恋の情を抑えがたいことは精神的な弱さだという見方も出来るかも知れないが、宣長は恋情に翻弄される人間を、否定的にはみていない。色恋の情を抑えがたいのは、人間が一樣に持つ情の真実であった。人間の本質としての「弱さ」であった。

そして、その「弱さ」を知り、そういうものだと受容することも、物のあわれを知ることな



のである。しかもその知り方は、客観的分析的にというのではなく、自分自身にもそういう部分があるという、自分に根ざした理解である。相手を分離せず、相手を通して、自分の中にもそれはあると気付く知り方、相手と自分との違いの無さを踏まえたうえの知り方ではないかと考えられる。だからこそその知り方は、道義的規範が介在しない知り方となるとも言える。

## (2) 僧と恋

以上のような情の制御しがたさ、特に恋については、僧が恋の歌を詠むという自体の表す意味を考えると、一層明白となる。宣長は、僧はむしろ戒というしがらみと向き合う立場だからこそ、人間存在全体にあてはまる弱さを知ることが出来ると考える。その背景には、宣長の次のような僧の位置づけがある。宣長は、僧をけっして特別な存在とは見ていない。修行中の僧はまず人間であり、悟りきった仏ではない。そうであるかぎり、「心のそこまでいさぎよく澄みはてむ事は、えしもあるまじく、猶此の世の濁りも残りぬべきわざなれば、色を思ふ心もなどかはなからむ」(『石上』巻二p.430-431)<sup>13)</sup>というように、僧と俗の人間は、人情において同質なのである。

僧は自身の持つ情と、俗世の人間以上に葛藤する存在である。仏教における戒めが重いのも、その戒めの内容が「人ごとにまぬがれかたくまどひやすき」(同p.431)ものだからと宣長は言う。実際、戒には不邪淫戒という人間にとってもっとも耐え難い男女の恋を禁じるものがある。僧がそんな中、自身の情との葛藤を結晶化させて恋の歌を詠むのは、ある意味、当然の筋となる。行動としては戒を破ることはできないが、情としての反応は内部に存するのである。その深き思いが、聞き手・読み手にも深い感動を与えうる優れた恋歌となる。

宣長は、僧の恋を巡る情と歌の関係について以下のような例を引いて説明する。

よに尊き聖のあらんに、いみじく盛りなる花紅葉の本にはしばし立ちよりて、あなめでたといひ思ひ、また道かひにてをかしき女に行きあひては、目も見やらずして過ぎ行くめり。この二つを思ふに、花紅葉も同じこの世の色香なれば、心とむべきにはあらねども、ことに執のとまるばかりはあるまじければ、法師もすこしはめでたらんもさのみとあるまじく、女の色はことに人の心を迷はして、必ず後の世の障りとなりぬべきものにて、世捨て人はさらに目にも触るまじきことにしあれば、この聖のふるまひはいと尊し。されど心の底よりまことに然りといはば、いみじき偽りなるべし。そのゆゑは、花紅葉の色香はめでたきもなほ限りありて、人の心に染むこと浅く、人の色は底ひもなく限りもなきものにて、心に染むことこよなう深し。さるを限りある花紅葉をさへめづる心に、限りなき女の色をばいかでかめでたしとは思はざるべき。(中略)

よき女を見ていささかも心を動かさざらむは、まことの仏なるべし。さらずは鳥虫にも劣りてむげに情なき岩木のたぐひとやいはまし。(『石上』巻二p.431-432)

盛りの桜や紅葉を見て立ち止まり、その美しさを愛でた僧が、道で会った魅力的な女性に対

しては目もやらず行きすぎた。その行為は確かに、僧として相応しい尊いものであった。しかし僧の心の底を考えると、その際に僧の情が表面の行為通りに無風状態で全く動いていなかったと判断するのは、間違いである。感じるべき情の深浅で言えば浅い桜や紅葉にさえ感動できる僧が、桜紅葉以上に人の情を深く動かす女性という対象に対してひとつも情を動かさなかったかといえ、そうではなく、それほどの感動する能力を持つ僧が、心の奥底で女性をすばらしく思わないはずはないのである。宣長は、僧が自らの立場に妨げになるからと女を避けることを尊いと評価するというよりもむしろ、僧の真の情に着目する。僧こそ人間として切実に抱かざるを得ない情を抱くのである。むしろ、女性をすばらしいと思わない事態があるとすれば、宣長はそのことを否定視する。実際の行為としては心の奥底の情に沿ったことはしていない。しかしだからといって、僧は感じざるを得ない情を全然感じないのではない。僧はむしろ、もののあはれを深く知る自らの情と対峙しているのである。宣長はかえって、僧が木石や禽獣のように何も感じない、情が動かないということをも人として恥ずかしいことと評価している。

そして、人間として抱かざるをえなかったその情を歌というかたちにして表出、発散することが、その感情や感情に基づく行為がタブーであるからこそ、僧にとって重要な営みとなる。

人とある中にも、殊に法師は妻をももたらず、この欲を常につつしむ物にて、いよいよ心には思ひむすぼるべき事なれば、俗よりもまさりて、恋の歌は多くあはれにいでくべき事也。志賀寺の上人の、何がしの御息所の御手を給はりて、玉ばばきの歌をうち誦したりとかいふ古ごとぞ、法師の心ばへにかなひて、あはれなるわざ也ける。

さやうにこころのうちに深くつもれる妄念をも、この歌によみいでていささかも思いはるかさむは発露懺悔の心にもかなひぬべくや。(同p,432-433)

とあるように、僧は心の中につもった恋の妄念を、歌を詠むことで晴らさざるを得ない。この営みは、色恋のことを全然考えてはいけぬ僧が恋の歌を詠むなんて、と僧を断罪する方向ではなく、むしろそうした情の歌のかたちでの表出が、僧自身にとって「発露懺悔の心」に叶う、むしろ修行にもつながる意味ある営みとなるのである。こうした僧のありようは、誰もが免れ得ぬ深い情・特に色恋・と人間が、ただそれを回避したりなかったことにしたりする仕方ではなく、正面から向き合うというありようを象徴していよう。

さらに言えば、そもそも、仏そのものが人間の弱さを理解している存在であった。「されどそれはもと仏の、深く物のあはれを知れる御心より、衆生のこの世の恩愛につながれて生死を離ることあたはざるを、哀れと思すよりのことなれば、しばらくこの世の物の哀れは知らぬ者になりても、実は深く物の哀れを知るなり。儒道も心ばへは同じことなり。(中略) 儒仏は物の哀れ知らぬやうなるがその道にして、畢竟はそれも物の哀れ知るより起れることなり。」(『紫文』巻上p.135-136)<sup>14)</sup>とあるように、仏教は人間の弱さに根ざした教えであった。人間が男女の情や親子愛などこの世での情愛に囚われて迷い苦しむ状況を仏自身が見過ごせず哀れと

「弱さ」を受容するということ—本居宣長「物のあはれ論」に即して

思う故に、救済のための教えを説いたというのである。すなわち、仏も人のまぬがれがたき弱さを感じ、理解し、それを踏まえて救済を誓うのである。この意味で、紛れもなく仏も「物のあはれを知る」存在に他ならない。

恋をはじめとして、親の子を思う気持ち、死にたくない気持ち等、人間が一様に情において深く反応せざるを得ない事象は、否応なく人間を取り巻いている。そうした人間の置かれたどうしようもない状況を仏も見ている、しかも仏も深く感じる情を持つという宣長の、仏と人間の情における通底性を暴く視点は鋭い。それだけでなく、そうした仏を巡る理解と宣長自身の人情理解が通底している点も非常に興味深いところであり、重要な点である。

確かに思いを抱くだけでなく、不倫などの行為に出してしまうことを愚かだと断罪することは可能であろう。しかし、人間というものは自分自身を完璧に制御できるほど強いのだろうか。またそれができないということを断罪出来る立場に誰が居ようか。その点において、人は均しい。宣長はその点を見据えている。

弱いから克服しよう、制御しようという方向に向かうのではなく、その弱さというところで人間としての共通基盤を確かめ合う営み、そういうことが許される場所の尊さを、宣長は強調するのである。僧に与えられた歌は、まさしくそうした場所の一つである。

それでは、そうした場所とはどのようなものか。自らの情を表出する側と、それを受け取る側で作られる共同体といってもよいものはどのようなものなのだろうか。最後にこの弱さの共有で成立する共同体について言及する。

### 三、情の共同体—「弱さ」の共有

さきに弱さを確かめ合うと言ったが、それはまず、歌なり物語なりに示される人間の「まぬがれがたさ」に触れるとき、聞き手がそれを自分自身にひきよせて考えられるということである。表現された情は単なる他人の情として受け取られるのみでなく、その情を通して自らの内部の弱さをも知るのである。そしてさらに重要なことは、人間は元来、自分の深い情を他者に伝え共感を求めるということがある。つまり人間は、自分の中の弱さを自分の身だけで閉塞的に処理するのではなく、弱さを介し他者と開放的に連なっていくのである。換言すれば、情の深さ-深い感動は人を孤立させるものではない。

このことを宣長の論で確認してみる。まず宣長は、『源氏物語』について作者である紫式部が自ら物の哀れを知って感動したことがらを書くことによって、読み手に物の哀れを知らせるものであるとする<sup>15)</sup>。この際宣長は、人というものは何か世の中に例のない珍しかったり不思議なことがあったりするとき、それを自分の心の内にのみ留めることができず、「人に語りて聞かせまほしき」(『紫文』巻上p.61)と思うものだとする<sup>16)</sup>。「人に語りたりとて我にも人にも何の益もなく、心の内にこめたりとて何の悪しきこともあるまじけれども、これは珍しと思

ひ、これは恐ろしと思ひ、悲しと思ひ、をかしと思ひ、うれしと思ふことは、心にばかり思うてはやみがたきものにて、必ず人々に語り聞かせまほしきものなり。世にあらゆる見るもの聞くものにつけて、心の動きて、これはと思ふことは、みな然り。詩歌の出で来るもこのところなり。」(同) というように、ここでは詩歌や物語がどのように生じるかが説明されてはいるが、宣長は、同時に人間の本性を指摘している。すなわち、自分が感じた感情を他者に伝えたいという気持ちを人間は一様に持つということである。

そして、どうして自分の情を表出せざるをえないのか、表出の効用についても宣長は指摘する。「見るところ、聞くとところ、思ふところ、触るところの物の哀れなる筋を見知り、心に感じて、それが心の内に籠めおきがたく思ふよりして、物に書いて心を晴らしたるなり。すべて心に思ひむすぼるる事は、人に語り、また物に書き出づれば、そのむすぼるるところが解け散ずるものなり。」(同巻下p.235-236) というように、心に抱いた感情は自分のうちに押しとどめることなく他者に向かって表現することで、「解け散ずる」すなわち鬱屈した状態から晴れ晴れと解放されるのである。自分の情を自分だけの物とせず外に表現するのは、そうすることで情を外に解放し、情につなぎ止められた自己をも解放するためであった。

このように、自身の情を表出し自らを自己の内部から解放すること、そして自分の情を自分のものだけにせず他者にも伝え、他者と共有したいという欲求は、人間として自然にあるものであると考えられている。このことからすれば、人間が深い情を外に表さず自分の中で自己完結してしまうことは人間として不自然であり、人間としてしかるべきありようは、他者との情の共有、もっと言えば他者による共感を求めるところにあらう。人間が自分の情を表出することは、したがってのぞましい、そうあるべきありようであった。

以上のことは、和歌の考察のところで一層明らかとなる。宣長によれば、和歌は「物のあはれに堪へぬ」(『石上』巻一p.312) 時に自然な文をなして生じる。和歌に詠むことで当人の内部に鬱屈していた情も晴らされるのであるが、一層深く感じた場合、和歌は「その事をひとり言につぶつぶといひ続けても、心の晴れせぬものなれば、それを人に語り聞かすれば、やや心の晴るるものなり。」(同) というように、聞き手を必要とする。しかも「さてその聞く人もげにと思ひてあはれがれば、いよいよこなたの心は晴るるものなり。」(同) というように、相手が「げに」なるほど共感してくれることが一層自分の心を晴れさせてくれるのである。

ここで一旦、逆に情の表出がない場合、「むすぼるる」状態について考えてみる。「むすぼるる」とは、自己の内に閉じこもる、自分の情を、外に出さないが故に自分自身の世界に閉塞してしまうということであろう。本来、情が動くのならそれは自然に表出に向かうのであるが、むすぼれる場合は不完全となる。当人にとっては自分の情を処理しきれず、未消化に終わる。しかもそれを共有し、共感してくれる相手が居ない場合、閉じこもりの中で鬱屈する感情は、誰とも分け合われることがないままである。宣長は、こうした「情」の孤立を否定視する。深く感

じたことを誰かと分かち合いたい、分かち合わないではいられなさが人間の情の本質としてある、その点を宣長は強調しているのではなからうか。

こうしてみると当事者からすれば、情の表出は不可欠な仕事である。しかし、さらにその表出するものへのレスポンスの存在、応答可能な他者がいることが、情の解放に一層役立つのである。思いが深いほど、聞いてくれ、また共感する他者の存在は必要である。表出する我とそれを受け取り、同様に反応する他者。その反応をまた我が受け取る。その相互関係が成立する場において、我と他者は相互に支え合う。お互いの思いへの反応は、相互の理解の反響、もしくは共感の反響といってもよからう。その表出を読み取ることで読み手が自分自身のありようにも向かい合う。他者の情の表出は、他でもない自分自身の情と向き合うこと、ひいては自分が抱える鬱屈をはらすことにも繋がっていく。

しかも面白いことに、この自他の連なりは、歌を実際にやりとりする場面等時空を共有する間柄のみでおこりうることではない。この種の連なりは時空を超えうる。ならびに、一対一でも、一対多でも成立しうる。現在直接目にしていなくても、物語というフィクションの枠組みの中でも理解しうる。相手が物語の登場人物でも、物語の中の状況でも可能なのである。和歌や物語を読み、その登場人物の情を理解し、自分のものとしても情を動かすこと、すなわち共感、間接的にも、時空を超えても起こりうる。そう考えなければ、物語を通して「物のあはれを知る」とはどういうことかを知るの、不可能とならう。

たとえば前章の僧の詠む歌であっても、現代の我々が許されぬ恋や報われぬ恋に心悩ます僧の情に共感することもできよう。この場合、確かに我々の共感が僧の鬱屈を晴らすことは物理的に無理であるとしても、僧のさらけ出した弱さを我々がそういうものとして共感して受け取るうちに、相互関係が成り立っているとは言えないだろうか。

また、物語に描かれたありようを自分自身にも引き寄せて、昔も自分と同じような人がいたのだと心を慰めることもある。この点について宣長は、『源氏物語』蓬生の巻のみすぼらしい生活をする末摘花が古い物語を見て心慰める場面を「さやうのことをも慰むるは、古物語に同じきさまのこともあれば、我が身のたぐひもありけり」（『紫文』巻上p.42）と説明する。末摘花は物語を通してみじめなありようは自分だけではないのだ、昔もあったのだと心を慰めるのであるが、これは現在鬱屈していた自身に対する情けなさなどの感情が物語に投影され晴らされるということでもあろう。物語を通して、末摘花は自身の感情と向き合い、自分だけではないと感じてその孤立から解放されるのである。「昔のことを今のことにひき当てなぞらへて、昔のことの物の哀れをも思ひ知り、また己が身の上をも昔にくらべみて、今の物の哀れをも知り、憂さをも慰め、心も晴らすなり」（同p.46）ともあるように、物語に書かれていることがらを自身の身の上に引き寄せることで「物のあはれ」を知り、心を晴らすことが可能となる。今と昔、私と物語の中のことが分離されるのではなく、互いに映しあわされて、理解されるの

である。たとえ自分が実際体験したことではなくとも、このような相互交流はありえよう。こういうときに人はこのように感じるのだ、こう振る舞うのだ、ということ了我々は「げに」なるほどと理解し、かつ自分のなかにも見いだしうるのである。

さらに、物語を読んだ当座は深く理解していなかったとしても、いざ自分が実際体験してみた時に深く思い合わされるということもある。前にも引いたが、「恋するとて思ひ入らるるを、人の上に見たり聞きたりする時は、うつし心とも思はれず、もどかしう思ひしが、今わが身の上に恋してみれば、げにいかにも堪へがたかるべき事なりと、わが身に思い当たるなり」(同巻下p.146)という夕霧が落葉の宮への自らの思いと向き合う箇所17の説明にもあるように、夕霧は、落葉の宮への深い恋情を抱く前は、いくら色恋の話聞いても、切に自分にもありうることとしては実感していなかった。むしろ、「うつし心ならぬ」こと、色恋に振り回されるのは正気の沙汰ではないとさえ考えていた。しかし、自分が抑え難き色恋の情に囚われてみると、なるほどと色恋は堪えがたいものだ実感できたのである。自分の中にはまさかあるまいと思っていた色恋の情の抑えがたさ、言ってみればそれは人間共有の弱さであるが、それを自分の中に発見するということがあるのである。この夕霧のことに基づいて考えれば、色恋は他人ごとではなく、自分のなかにもそれに翻弄される部分が確かに存すると気付くこと、これが弱さの共有という時のポイントなのではないか。

ともあれ、歌や物語を介して成立する共同体は現前の共同体のみならず、時空を超え、人間存在全体を貫く共同体であると言える。そこにおいて人間の持つ情のありようという普遍の型に触れるというのであれば、現前の共同体の価値規範が人間を意味づける唯一の規範であるとはいえない。そこに、歌や物語を通してあらわにされる、人間の情のありようが型となる新たな規範があり、またそれにより人というものが理解される。そうして人と人が結びつけられていくのである。

話が大幅にずれたが、情の共有・共感ということからすれば、まず自身が自分の情を表出できるということが前提条件となろう。どれだけ他者を感動させるか、他者を感動させるにはどうすればよいかという表現の問題も重要だが、問題が大きくなるのでここでは立ち入ることは出来ない。別の機会に考えたいが、ここで言いたいのは、当事者が自分の情、及び深く感動したその感情の制御しがたさを女々しく弱々しいものと決めつけ、自分自身にすら隠そうとすることが、人間にとっては相応しくない態度であるということである。自分の持つ「弱さ」をごまかすことは、しかるべきありようではない。自身が情の感受性の鋭さと適切さ、制御しがたさを十分踏まえて、自身の情の動きと素直に向き合い表出したとき18他者との連なりも開かれる。他者は、当事者の弱さに表出された言葉を介して出会う。もし自身が隠していたとすれば、それは他者には伝わらない。自分の情はしかも、「むすぼるる」ままである。共有・共感されない「弱さ」は、閉塞した内部で朽ち果てるしかない。他者が「弱さ」を受け取り、感動し、

「げに」と納得してくれ、自分の中にもそれはあることにも気付いてくれる。「げに」とまた投げ返す共感、「弱さ」の共有を可能にする。人とはそういうものなのだ、誰も彼もそういう「弱さ」を持つのだ、その「弱さ」こそが前面に出てくる場として、歌や物語は、我々の自身の発見、人間の発見を可能にするのではないか。その「弱さ」の発見が「物のあはれを知る」ことの中核にあるのではないか。

#### 四、結論—弱さの受容

以上のように、本居宣長における「物のあはれ」論は、人間のいたしかたない弱さに根ざしている。その弱さとは、あらゆる事象、特に色恋などの場面で深く動かざるを得ない情の本質的なありようであった。深く情が動き、それを抑制・制御しえないこと、それがまず物のあはれを知ることの一側面であった。加えてそれのみならず、自身でコントロールできない事象、特に男女の恋における感情や行為の存在を他者の中にも見だし、それを認め、受け入れることも物のあはれを知ることの重要な側面であると言える。それは自分にもある弱さだからこそ認め、受け入れるのである。それはけっして高見から見下ろし、断罪するようなものではなく、対等な立場での受容である。したがって、相手を道義的に咎めるという態度はそこにはない。

確かに、自分は足を一步踏み出していない。道義的には何も道に外れることはやっていないという点で、相手に対して優越するといえるかもしれない。しかし、そうなるかもしれない弱さはほかならぬ自分自身にも内在する。そのことを直視した上での、他者の受容なのである。

こうした弱さの相互確認、自己も他者も同じく弱さから免れぬ存在であるということを確認合うということが、相互の連なりを強くする。紛れもなく同じ人間存在同士であるゆえに、我も他者も免れ得ぬものを持つ。そのことを理解することは他者の理解というにとどまらず、自分自身の弱さとの出会いということでもあろう。いわば、自分自身と、古今を通じて人間であるという同じ基盤に立つ他者一般の持つ弱さの理解、弱さの共有である。

免れ得ぬ弱さに対して、いや免れ得るのだ、コントロール可能であるとするのが、儒教道德の立場であろう。しかしそれは規範の問題であって、弱さの受容ということと次元が異なる。宣長は明確に自分自身で線を引く。さらに他者の弱さを扱う場合、弱いから仕方ないからといって、なした行為に対する罪が免ぜられるというわけではない。それはまた、別の問題となることも宣長は承知である。むしろ、その弱さを前提として儒仏の規範も生じているという（『紫文』巻上p.136）<sup>19</sup>観点からみれば、次元は異なっても人間の共同体の根底に「物のあはれを知る」という紐帯が存すると言える。

このような弱さの共有もしくは共感、ともに持つ弱さによってつくられる共同体において成立する。弱さが人間の本質であるとするれば、その共同体は人間がつくる現実の共同体に限らない。人間の生のかたちを表現する和歌・物語文化という共同体でこそ、成立しているのである。

しかも、その共同体において、「世の有様を知り、人の情に通じ」（『紫文』巻上 p.46）ることが可能となり、そもそもあった弱さを他者へ連なる鍵として使えるようになる。

そこに描かれる共同体が、歴史や文化や風土において特殊な世界であるにしても、その特殊な世界を通して普遍に繋がる通路が開いている。宣長の和歌や物語の持つ重要性は、フィクションの域にとどまらないのである。

了



## 注

- 1) 『紫文要領』巻上p.67.『紫文要領』からの引用は、日野龍夫校注『本居宣長集』（新潮日本古典集成）新潮社1983所収のものによる。以下、『紫文要領』からの引用は、『紫文』と表記し、頁を記載する。
- 2) 『石上私淑言』巻二p.408-p.410.『石上私淑言』からの引用は、前掲書所収のものによる。以下、『石上私淑言』からの引用は『石上』と表記し、巻数と頁を記載する。
- 3) その事物・事象の「趣き・心ばへ」の訳は、前掲書の校注者、日野龍夫氏の解釈による。同義語として「事の心」（『石上』巻一p.282など）がある。「趣き・心ばへ」を弁えるということは、事物や事象のありようを的を外すことなく適切にその中核を捉えることだと考えるので、論者もここで「本質」という解釈を採っておく。
- 4) 「すべて世の中に生きとし生ける物はみな情あり。情有れば、物にふれて必ず思ふことあり。（中略）その中にも人はことに万の物よりすぐれて、心も明らかなれば、思ふこともしげく深し。そのうへ人は禽獣よりも事わざのしげき物にて、事にふるること多ければ、いよいよ思ふこと多きなり。（中略）その思ふことのしげく深きはなにゆゑぞといへば、物のあはれを知るゆゑなり。事わざしげき物なれば、その事にふるるごとに、情は動きて静かならず。（『石上』巻一 p.281）
- 5) 物のあはれを知ることは、生活の隅々のことがらから背景を踏まえた人の気持ちまで、人間の生のあらゆることにわたる。宣長は『紫文要領』において、容姿の良し悪し、着物や調度の趣味や日常の家事、後見なども含めて、その善し悪しが分かることもものあはれを知ることとしている。したがって、ただ感じるということが重要なのではなく、まず前提として対象をそれに相応しく知り、その知ったことに対する適切な感じ方が重要になる。感じることと知がここでは不可分なのである。
- 6) 動かざるをえない情をめぐっては、それが動いたということのみならずそれをいかに晴らすかということも、その情を抱く当人にとって重要な問題となる。情を晴らしきる必要があるということだが、またこのことは、当人の情を受け止める他者の反応にも絡んでくる。当人が情をはらしきるために、他者にその情が適切に伝わること、そして他者が共感することが重要となる。そのために、情の晴らし方、すなわち表現の仕方が問題となる。このように、情を抱くことは、当人だけの問題に留まらず、当人が他者とどういふように通じ合うか、という問題にもなる。ここでは、この問題には踏み込まず、次回の問題とする。
- 7) 「をかしきこと・うれしきことなどには感くこと浅し。悲しきこと・恋しきことなどには感くこと深し」（『石上』巻一p.298）というように、悲しみや恋情は動きが深い。
- 8) 宣長は、「情」と「欲」を以下のように区別する。情の動きの深浅は、「情」と「欲」の相違とも繋がる問題である。ここでは、「歌」がそこから生じるあはれの深さをもつ情のありようが重要であり、恋情もその中に入る。「情」と「欲」とのわきまへあり。まづすべて人の心にさまざま思ふ思ひは、みな情なり。その思ひの中にも、とあらまほし、かくあらまほしと求むる思ひは、欲といふものなり。さればこの二つは相離れぬものにて、なべては欲も情の中の一種なれども、またとり分きては、人をあはれと思ひかなしと思ひ、あるは憂しともつらしとも思ふやうのたぐひをなむ、情とはいひける。（中略）歌は情の方より出で来るものなり。これ情の方の思ひは物にも感じやすく、あはれなることよき深きゆゑなり。欲の方の思ひは一筋に願ひ求むる心のみにて、さのみ身にしむばかりこまやかにはあらねばにや、（中略）、色を思ふももとは欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひにて、生きとし生ける物のまぬかれぬところなり。まして人は、すぐれて物のあはれを知るものにしあれば、ことに深く心に染みてあはれに堪へぬは、この思ひなり。」（『石上』巻二p.421-p.422）
- 9) 宣長は、『源氏物語』における紫式部の人物評価にそくしてよき人を挙げ、『源氏物語』の場面に即して評価している。「…紫式部が心に源氏の君をよしとして書けるなり。かくのごとく不義淫乱をばうち棄ててかかはらず、源氏の君をよき人にしたるは、人情にかなひて物のあはれを知る人ゆゑなり。…」『紫文』巻上p.91-p.92『紫文要領』巻上p.88-p.94あたりを参照のこと）
- 10) 宣長は『源氏物語』薄雲の巻「これはいと似げなき事なり。恐ろしう罪深き方は多くまさりけめど（中

略)」の一節を引き、源氏が薄雲の女院との恋に罪悪感を抱きながら、秋好む中宮への思いを不都合なことと判断しているとする。しかしここで「似げなき事」として不義の恋に堪えきれぬわけではない源氏の有り様を、宣長は強調する。「されどもその上になほ忍びぬこともまたあるなり。ゆゑに源氏の、この後にもなほ朧月夜に密通は絶えざりしなり。その所の詞に、「いとあるまじき事といみじく思し返すにも、かなはざりけり」(若菜の上に見ゆ。前に引く)といへり。さればその忍びぬところの物の哀れを知る人は、人をも深くとがめず。」(『紫文』下p.153) 堪えようと思つても堪えられない情の深さを抱える源氏を、その思いの深さを身をもって知るが故に「物の哀れを知る人」として、宣長は高く評価する。以上、『紫文』下 p.152-p.153参照)

- 11) 『紫文』巻下 p.155-p.158参照.
- 12) 宣長は特に、柏木と女三の宮の柏木の死ぬ間際の歌の贈答場面を物の哀れの深き場面とする。「柏木の巻に、衛門の督、女三の宮の御事によりて病づき、つひにはかなくなりなるところの歌に、今はとて燃えむ煙もむすばほれたえぬ思ひのなほや残らん宮の返し、立ち添ひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱る煙くらべにこの物語のあまたの恋の中にも衛門の督今はの書きざま哀れ深きが中にも、この贈答はことに哀れ深く見ゆ。(『紫文』下p.147-p.148)
- 13) 引用部分に「此の世の濁り」とあるが、仏教の立場で言えば、男女の情欲は穢れ、濁りなのでこう表現されているが、いうまでもなく、宣長自身が色情を濁りとしてマイナスの価値観をもって評価しているわけではない。
- 14) 『紫文要領』参照。日野龍夫によれば、『紫文』巻上p.135-136 14行目付近に原注(一五)として付箋があり、以下のようにあるという。「仏の物のあはれをよく知り給ふと云ふ事、『長秋詠藻』に云はく、「『法華経』の歌、人記品、寿命無有量以愍衆生故、かぎりなき命となるもなべてよの物のあはれを知れるなりけり。」『本居宣長集』新潮社1983所収『紫文要領』p.247
- 15) 「この物語、物の哀れを知るより外なし。作者の本意が物の哀れより書き出でたるものなれば、「その見るにもあかず、聞くにもあまる」事どもを書きて、それを読まん人にも物の哀れを知らさむためといふこと、このところの文にて悟るべし。」(『紫文』巻上p.62)
- 16) 「今、人、世にためしなき珍しきあやしきことを見たらんに、わが心の内にのみ「あやしきことかな、珍しきことかな」と思うてばかりはゐられぬものなり。さやうのことを見聞けば、人に語りて聞かせまほしきものなり。」(『紫文』巻上p.61)
- 17) 『紫文要領』巻下p.145-p.146 『源氏物語』夕霧の巻 「人の上などにてかやうの好き心思ひ入るるは、もどかしょうつし心ならぬ事に見聞きしかど、身の上にてはげにといと堪へがたかるわざなりかり。あやしや、などかうしも思ふらんと、思ひ返し給へど、えしもかなはず。」の箇所説明である。
- 18) もちろんこれは、どんな工夫もなきままに表出すればいいと言うわけではない。ここでは言及できていないが、自身の情を晴らすためにも、他者とより深く共感し合うためにも、和歌の技巧を身につけることは必要となる。
- 19) 「儒仏は物の哀れ知らぬやうなるがその道にして、畢竟は物の哀れ知るより起これることなり。」(同)